

遊あそびの一句

名句鑑賞

雪とけて村いっぱいの子どもかな

小林 一茶

長い間雪にとざされた生活をしていた子ども達が、ようやく雪解けの季節を迎えて、家の外に出て思いっきり遊んでいる情景が描かれています。季語は「雪とけて」で春の句です。

月光ほろほろ風鈴に戯れ

荻原井泉水

月の光が風鈴に当たって静かにこぼれ落ちるかのように感じられます。「ほろほろ」という表現には、視覚と聴覚との絶妙のコンビネーションが見られます。季語は「月光」と「風鈴」で、季節は、夏から秋（無季）の句です。

風船をつれコスモスの中帰る

石原 八束

風船を飛ばしながらコスモス畑のなかを歩いて帰ります。軽やかな気持ちで伝わります。季語は「コスモス」で、秋の句です。

咳の子のなぞなぞあそびきりもなや

中村 汀女

咳をした子どもがなぞなぞ遊びをしています。退屈していたのか、いつまでもそれを続けています。季語は「咳」で、冬の句です。



自然と生き物

やせがへる負けるな一茶

これにあり

小林一茶（一七六三〜一八二七年）の句。農家に生まれ苦労も多かった小林一茶には、風土の自然や生き物を素材にした「一茶調」とよばれる作品があります。

右の句は、一茶の代表句です。あたたかいまなざしをもって小動物や昆虫を描いています。自然や生き物に共感する気持ちが俳句創作の第一歩です。



子どもの俳句から

春

こま回し目までいっしょに回ってる

小学生
松岡

寛子



鑑賞のポイント

☆こま回しをすると、速いスピードに目までまわってしまいそうになります。その驚きを生き生きと描いています。季語は、「こま回し」です。

ひばりより高く上がれやぼくの凧

小学生
佐藤

謙太

☆空高く舞い上がりながらさえずるひばりよりも、高く凧をあげようとする作者の気持ち伝わってきます。季語は、「凧」です。

夏

しろいくもそらはおおきなびじゅつかん

小学生
西田

春華

☆白い雲は刻一刻と姿を変えて行きます。それをながめているとまるで大きな美術館にいるような気になります。「白い雲」には、夏の季節の感じがあります。

手のひらにおちてきそうな花火かな

小学生
伊藤

彩

☆夜空に打ち上げられた花火には、落ちてきそうなほど大きなものもあり、思わず手ですくおうとしてしまいます。季語は、「花火」です。

秋

馬とびどんぐり落ちる木の下で

小学生

嶋野 圭介

鑑賞のポイント

☆どんぐりを落とすブナの大木の下で、馬とびをして遊んでいます。季語は、「どんぐり」です。

赤とんぼ一緒に帰る田んぼ道

小学生

あさの圭亮

☆田んぼ道を歩いていると、赤とんぼが近寄ってきます。一緒に帰っているような気持ちになりました。季語は、「赤とんぼ」です。

冬

鉄ぼうでくるくる回る冬の風

小学生

徳原 りな

☆鉄ぼうで回っているのは冬の風です。風の姿は目には見えませんが、冬の冷たい強風は、鉄ぼうを「くるくる回る」ように感じられます。普段見えないものを見ようとし、感じないものを感じようとしています。季語は、「冬の風」です。

竹馬にはじめて乗れた大夕焼

小学生

西崎円美子

☆竹馬にはじめて乗れた日に見た大きな夕焼は、決して忘れることのない感動的なものでした。季語は、「竹馬」です。

雑

おにごっこ夕日にたたずむ影法師

小学生

盛藤 康宏

☆おにごっこをして遊んでいると、ふと夕日によってできた影法師に気づきました。

創作(遊の句を作ってみよう)

○遊びについて、印象に残っていること、思い出など、いろいろ書き出してみましよう。

○遊びに關係する季語を集めてみましょう。

○遊びの句を作ってみましょう。

[illegible]